

みなみやまちょう

## 南山町遺跡(本発掘調査B)

**所在地** 江南市南山町東地内  
(北緯35度18分51秒 東経136度52分50秒)

**調査理由** 一般国道155号道路改良工事

**調査期間** 令和2年7月～令和2年10月

**調査面積** 1,040㎡

**担当者** 池本正明・武部真木



調査地点(1/2.5万「小牧」)

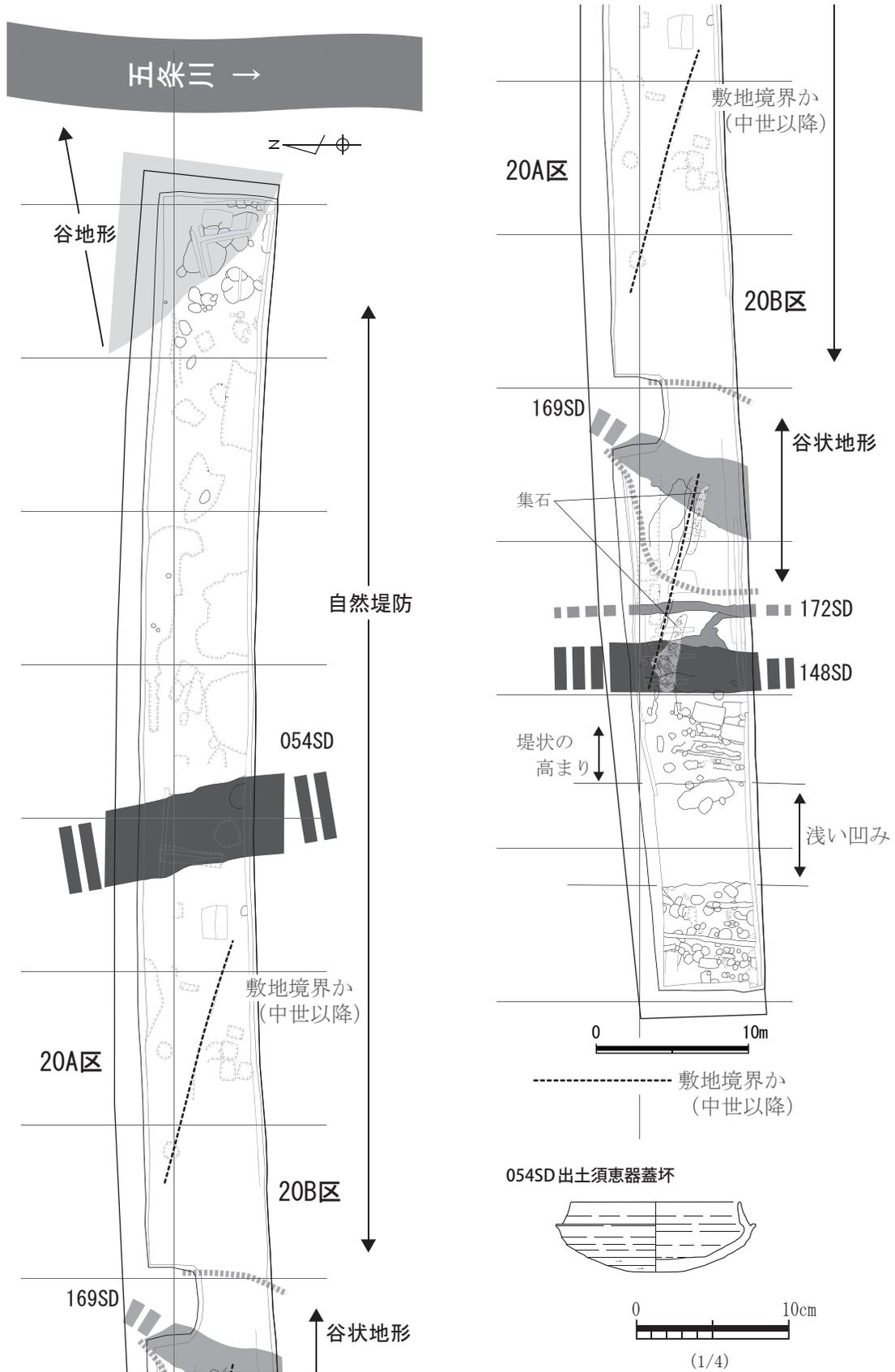
**調査の経過** 調査は、一般国道155号道路改良工事に伴うものであり、愛知県建設局道路建設課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行った。調査対象地は現道南側の拡張部分にあたり、東西方向に約100mとなる長方形の調査範囲について、東から20A・20B区の2区に分割して行った。調査面積は計1,040㎡である。

**立地と環境** 遺跡の所在する江南市は、尾張北部の犬山扇状地の扇中央部に立地する。調査遺跡は市域の南東部にあたり、隣接する大口町との境界に近い五条川右岸の標高約16mの自然堤防上に立地する。周辺一帯には多数の古墳が分布し、調査地点のすぐ北側には『尾張名所図会』にも記載のある富士塚古墳、南東方向約1.0kmには全長約60mの規模をもつ6世紀の前方後円墳、曾本二子山古墳などがみられる。なお、同事業に伴う遺跡調査は前年度より行われており、五条川対岸の大口町・白木遺跡では飛鳥～奈良時代の竪穴建物、掘立柱建物が展開する集落跡が見つかった。

**調査の概要** 今回の調査範囲は、南流する五条川に対して直交する方位となり、五条川右岸の自然堤防および後背湿地の地形を横断する形となった。犬山と岩倉方面を結ぶ柳街道(岩倉街道)が富士塚古墳の西側を通り、調査区が含まれる南東側の河川寄りの範囲には緩やかに起伏する畑地が広がっており、土器、須恵器、陶磁器細片などが耕作土中に多数含まれている。遺構が検出されたのは、20A区の東端と中央付近の一部、20B区の範囲であり、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の遺物が出土している。

**20A区** 表土を除去するとすぐに基盤層(砂質シルト層)に達する。東端付近は五条川にかけて傾斜する谷地形があり、削平を免れた部分では耕作等に関連すると思われる不整形の土坑が確認された。埋土には炭化物粒、土器、須恵器、山茶碗、中世・近世陶磁器の小片などが混在する。全体では旧地形の自然堤防の高まりが標高16mのレベルで削平されており、周辺から運ばれた覆土から8世紀を中心とした須恵器が出土している。明確な遺構としては大型の溝がある。溝(054SD)は概ね南北方向に延び、残存部分は幅4.9m、深さ0.8mあり、断面では西側の立ち上がりやや急となる皿状を呈する。南・北壁断面で埋土の堆積状況に違いがみられ掘り返しがあったと考えられる。最下層では台付甕や高坏などの3世紀後半～4世紀初め頃の古墳時代土師器、中層では7世紀前半頃の須恵器蓋環(1点)、上層では8世紀代の須恵器杯や蓋が複数出土している。堆積層はシルト層・細粒砂層を基本として、南壁では中位にやや厚い砂層が含まれる。近在住民によれば、20A区付近にはかつて(子供の頃)は「川に沿って山のような高まり」があり、また近年まで墓があったという。

**20B区** 調査範囲東端より続く自然堤防の西側傾斜面から後背湿地の地形が含まれる。ここでは自然堤防は東西方向で幅約70mを測り、その西側は約1.0mの褐色砂質シルト層(耕作土)が堆積する。その下に最深部(旧流路169SD)標高が14.5mとなる埋没した谷状地形が



主要遺構配置図 (S=1/400)

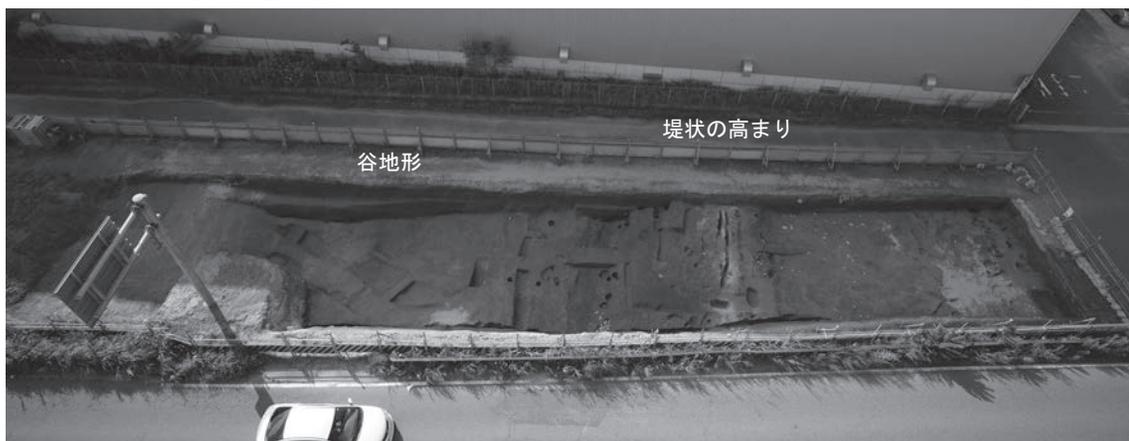
約20mの幅で確認された。20B区で検出された遺構には、上面では北西-南東西方向にのびる円礫の集石(089~092SU、115SX)、幅約5.0mの南北方向の堤状の高まり、また下面では谷状地形が埋積する過程で掘削された南北方向の溝(172SD,148SD)などがある。

集石は2ヶ所に分かれて検出された。西側(089~092SU)は長さ4.0m、幅は広い部分で1.2mを測り、断面でも溝状の掘り方などは確認できない。大小の円礫が斜面に重なり、周囲からは須恵器杯・平瓶・長頸瓶、灰釉陶器碗、土師器鍋、山茶碗などが出土する。東側(115SX)は長さ4.5mにわたり径10cm程度の円礫と山茶碗・小皿が疎らに並ぶもので、幅は一定しない。これらは石材のサイズや分布、出土遺物などで様相が異なるものの、直線的に連続する方位・検出レベルとなっており、耕作時に集められた周縁部、敷地境の痕跡かと考えられる。

集石列の西端に接する堤状の高まりは盛土ではなく、基盤層が高く残っている部分である。上端部では、平行する溝状の耕作痕や大量の円礫が入る土坑や現代の攪乱も確認され、近年まで大畔や道として利用されていたと考えられる。堤状高まりの西側は地表から約70cmまで耕作により攪拌されており、その下では幅6mほどの浅い凹みのほか、多数の土坑・ピット状の凹み、溝などを基盤層上で検出した。埋土はいずれも短期間に埋められた状況を呈しており、遺物はほとんど含まれない。耕作に関わる痕跡かと考えられる。

溝(172SD,148SD)は、堤状の高まりとほぼ並行するように下層の谷状地形の西縁に確認された。148SDは幅3.0m、深さ0.8m、172SDは最下層の幅0.6mを検出したが、北壁断面では幅1.1m、深さ0.6mが確認できる。谷地形全体を覆う砂混じりの粘土層は上位が攪拌されており、直上のシルト層は灰釉陶器を含み、これらの溝の上部をも削平している。溝埋土の下層はともにブロック状に粘土が混じる砂層、沈鉄層が認められ、148SDでは台付甕など古墳時代土師器と灰釉陶器が出土している。両者の間にも溝の痕跡があり自然流路の可能性も考えられる。

**ま と め** これまでに市域の発掘調査事例は少なく、周辺に多数分布する古墳の造営に関わる集落遺跡等の実態についても不明瞭な地域であった。調査で確認された遺構・遺物等は決して多くはないものの、扇状地という地形・地質の特質に応じた土地利用法の変遷が窺われた。ここでは4世紀初頭の古墳時代以降、あるいは少なくとも8世紀頃までには集落が営まれる程度に安定した環境があったと推測される。また耕作土中とはいえ、土器・須恵器・山茶碗片などの遺物が周辺一帯に広く分布しており、特に古代以降に開発が活発化していったと推測される。(武部真木)



20B区全景(北から)



遺跡遠景と五条川(北から)



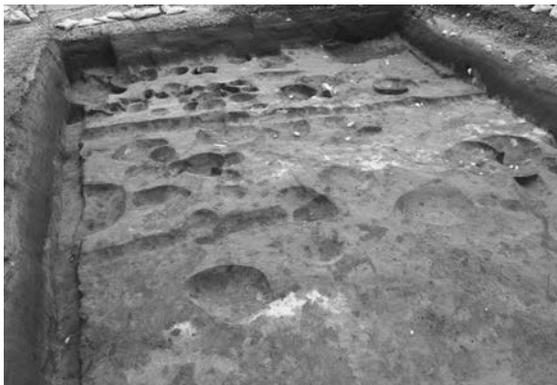
20A区054SD(南東から)



20B区集石検出状況(西側)



20A区出土須恵器杯



20B区西端付近の土坑・溝(東から)



20B区堤状高まり(北から)



20B区谷状地形断面(北東から)



20B区148SD・172SD(北東から)